



(一面より続く)

古屋大学教授)が、身近な教育活動についてざっくばらんに話し合ったりすることをFD活動とみなそう、という主旨の話がされていました。「就業力」についても、身近な教育活動を振り返りながら、それをいかに結びつけていくのかというFD活動も、同時に必要となるでしょう。このような教育活動を、ここでは「間接的な就業力育成教育」と呼んでおきます。

しかし当然のことながら、各教員の授業や指導では、直接、職業や労働、キャリア形成に関する内容を扱うことはできないでしょう。そこで、別枠として、キャリア形成をテーマにした授業が必要なのです。それが、本センター管轄科目である「キャリアデザイン科目群」です。これを、「直接的な就業力育成教育」

### 全学共通教育科目

### 「懇談会」開催

一〇月一日(金)、全

学共通教育科目の担当教員(専任・非常勤)が一堂に会した「情報交換会」が、本学七号館地下ラウンジで行われました。津上英輔共通教育研究センター長、油井雄二学長の挨拶の後、浅井良雄共通教育運営委員長による乾杯で、歓談が始まりました。参加者は約六〇人で、盛況のうちに終了しました。

と呼んでおきます。大学に、キャリアデザインを直接テーマとして扱う授業が必要なのかという批判もあるでしょう。しかし、学生が社会の中で自らの力で生き抜くことを考える場を提供することは、教育機関である大学に課せられているミッションです。それを、学

部や学科単位でのカリキュラムに納めることは物理的に難しいからこそ、別枠として設置する意義があるのです。直接的、間接的、双方の就業力育成ということ、車の両輪のごとくバランスよく動かし、大学の建学の精神や特徴に見合った大学独自の「就業

力」を確立していくことが、大学における就業力育成において必要なことだと考えられます。今年度文部科学省が公募した「大学生の就業力育成支援事業」に、本学のプログラムが採択されたことは記憶に新しいこと

でしょう。この事業に採択されたことによって、培われた成果をさらに発



中締め：杉本教務部長



乾杯：浅井運営委員長



挨拶：油井学長



挨拶：津上センター長



「総合講座II」へ感動を創るから生まれた  
『アート・プロデュースの現場』

成城大学では、現在、アート・シーンに関わる共通教育科目の一つとして総合講座II「感動を創る」が開講されています(後期・木曜五時限)。私は、昨年度よりこの講座の担当者であり、かつ、コーディネーターも担っています。当該科目の趣旨は、アートとビジネスが相互浸透する状況を踏まえ、感動を創る芸術・アートの社会性を理解し、人文科学と社会科学の交差点ともいえる、アート・プロデュース&マネジメントの意味、アートとしてのエンタテインメント産業をいくつかの視点から考察することで、そして、音楽・演劇、展示会、展示会、ファッションショーなどの様々なイベント事例をとりあげ、創造と運営、プロデュース&マネジメントの役割と対象を様々な

本年八月、昨年の総合講座IIの講義内容をもとにした『アート・プロデュースの現場』が刊行されました。本書では八つのテーマをとりあげていますが、それぞれについて簡単に紹介します。

一鑑るアートから買うアートへ  
山本冬彦(アート・ソムリエ) アートの生産者・販売者・ユーザーの現状、アートソムリエの活動、ギャラリートゥアーと若手作家発表の場づくり、無名の作家を買うことの意義などが述べられる。

二演劇をプロデュースすることと公共劇場から考えること  
奥山緑(演劇プロデューサー) プロデューサーが気にすること、なぜプロデューサーになろうと思ったか、公共の劇場、演劇の現場で働く人、プロデューサーに必要なもの、目指すもの、具体的なプロデューサーの仕事

などに言及される。

三、聴く衣裳、効く衣裳  
西原莉恵(舞衣衣裳デザイナー) 衣裳の世界に入るきっかけ、聴く衣裳・効く衣裳の意味について語られる。

四 大衆を創る: テレビにおける「プロデューサー」論  
阿部勤(経済学部准教授) テレビ放送の位置と意味、テレビ制作者たちのテレビ論、大衆のあり方などが論じられる。

五、演奏様式と社会  
小林義武(文芸学部教授) 宮廷、教会、市民、演奏様式、記譜法の違い、楽器の違い、ピッチ、奏法の違い、解釈の違い、合唱団の構成などに言及される。

六、能の勧進 今昔  
梅若靖記(能楽観世流シテ方) 能に見られる「勧進」、能の公演と時代変遷、能のプロデュース、海外公演に必要な知識、プロデューサー創り、人脈作

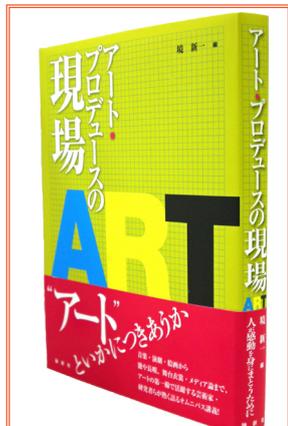
りなどが詳しく記される。

七、伝承と発展  
六世・杵家弥七(長唄杵家派家元) 長唄概説、文化譜の創造、新渡戸稲造との出会い、「季座」の目指すもの、教育指導要領の改訂、伝承と発展の意味について総括される。

八アート・プロデュース&マネジメントへの誘い  
境新一(経済学部教授) 自身のイベントプロデュースの経験を踏まえ、アート・プロデュース&マネジメントの理論的枠組みについての試論である。

ます。アートとビジネスの出会いには、究極のところ異分野の人々相互の出会いに尽きます。縁を結び、縁を尊び縁に随うことによって、人を感動させる価値の創造および提供がなされる、そしてプラスαとしていかなる価値を加えるかが重要です。プロデューサーは異次元のものを創造し、イノベーションを引き起こすトリックスターと言えるでしょう。

私は、彼らの並々ならぬ意欲にあふれた講義と学生の反応を鮮明に記憶しています。この科目が、今年度もまた、成城大学に学際的なチャレンジ、新たな一石を投げられれば幸いです。(経済学部・境新一)



★ 2009年度総合講座IIの内容を収録  
境新一 編著  
『アート・プロデュースの現場』論創社刊  
定価：2,500円+税

## 【おわびと訂正】

ニュースレター第1号4ページ目掲載の「共通教育研究センターセンター員」の名簿について、経済学部増川純一先生のお名前が掲載されていないことが判明いたしました。この場を借りておわびすると共に、下記の通りセンター員名簿表を訂正させていただきます（再掲は訂正箇所のみとさせていただきます）。

### 共通教育研究センター センター員

(2010年度：学部別・50音順、氏名の後は所属部会)

センター長 文芸学部 教授 津上英輔

#### 経済学部

准教授	阿部 勘一	教養 (教養・WRD・IT)
教授	小平 裕	教養 (キャリア)
教授・教務部長	杉本 義行	教職
教授	田中 誠一	体育
教授	中條屋 進	教養 (WRD)
教授	塘 誠	教職
准教授	中村 理香	教養 (教養)
教授	牧野 陽子	教養 (外国語)
教授	増川 純一	教養 (IT)

**FD公開ワークショップ開催のお知らせ**

本センターでは、来る二月四日(土)午後三時から、3号館三階大会議室で、公開FDワークショップを開催いたします。本センターの科目であるWRD科目(「Write」)の「書く・Read」読む・二〇〇七年一月二一日に、戸田山和久先生(名古屋大学教授)を講師にお招きして、FD講演会を開催しました。その後FD講演会は、FD委員会の事業として引き継がれましたが、今回、本セ

目では、大学での学びの姿勢として、一方的に知識を与えられるのではなく、学生が授業に主体的に取り組み、実践的な訓練を行うことを通して、三つの基礎的な能力を主体的に身につけていくことを目的としています。ワークショップの姿勢、特に「聞く」ことの重要性を中心に授業は展開されているものを、問い、考えたことをいかにして書くかという、書くことに関する成果を上げるのはなかなか難しいのが現状です。書くことを教えると言うと、例えば句読点の打ち方、主語述語の一貫性など、枝葉末節な技術指導に終始しがちです。そのようなことに終始することなく、「問う」「考える」として連動させながら書くことを教育することが必要です。ただ、それをどう教

えるのか、文章化、言語化する方法の教授法には悩まされるところです。今回のFDワークショップは、そのような点を踏まえ、「表現教育の可能性」というテーマを設定しました。ワークショップのパネリストには、石黒圭先生をお迎えします。石黒先生は、一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科の准教授で、専門は日本語学、文章論です。著書に、日本語の文章理解過程における予測の型と機能(ひつじ書房)、『よくわかる文章表現の技術I-V』(五冊ともに明治書院)、『読む技術―速読・精読・味読の力をつける』(文章は接続詞で決まる(光文社新書)、ほか多数あります。石黒先生には、文章論の立場からレポート、論文を書くための教授法、表現教育について

## 第二回WRDプレゼンテーションコンテスト開催のお知らせ

前回の本紙で詳細をお知らせした通り、今年度もWRDプレゼンテーションコンテストを開催することとなりました。今年度は、五クラスから七チームのエントリーがありました。

WRD科目の授業成果を、是非ご覧下さい。

★第二回WRDプレゼンテーションコンテスト

日時：二月八日(土) 一三時～一八時

会場：3号館階322教室

プレゼンテーションマ・「たべる」

※このテーマから各チームが自由にテーマ設定をして二五～二〇分程度のプレゼンテーションを実施します。

講演者：一橋大学国際教育センター・大学院言語社会科学研究科准教授 石黒 圭 氏

コーディネーター・聞き手：文芸学部准教授 東谷 護 氏

か難しいのが現状です。書くことを教えると言うと、例えば句読点の打ち方、主語述語の一貫性など、枝葉末節な技術指導に終始しがちです。そのようなことに終始することなく、「問う」「考える」として連動させながら書くことを教育することが必要です。ただ、それをどう教

★FD公開ワークショップ

「表現教育の可能性」

日時：二月四日(土) 一五時～一七時三〇分

会場：3号館三階大会議室

## 『とりのこえ』

成城大学 共通教育研究センター  
ニュースレター 2010年度 第2号  
(2010年12月1日発行)

発行責任者：津上 英輔  
編集担当：阿部 勘一

成城大学 共通教育研究センター  
〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20  
Tel: 03-3482-9556 Fax: 03-3482-9053  
e-mail: kyotsu@seijo.ac.jp